

僕の方を見ては笑顔をして居た。其内藝當が初まつて馬上の早變りといふのをしたが、其扮装を變る事の速いには見物一同暫くは拍手して止まなかつた。少年は馬から下りて帽子を取り見物一同に禮をして寄捨を願つた。見物席の半分も廻らん内に其帽子の内には錢や菓子が増える程集まつた。雖て少年は僕の前の所迄來たが、僕には其帽子を差出さずに行つてしまつたので、僕は何故だか不明ないので一寸妙に感じた。

藝當が皆終つて興業主は一同に御禮を述べ觀客は立上がつて出口の方へと流れ出した。僕も押され乍ら出口の所迄來ると、誰だか僕の手を引くので振り返つて見ると曩の少年輕業師が愛嬌たつぷりな顔をして僕に叩頭をした。彼は一方の手に菓子を持つて何か言はうとして居る。僕は此時萬事を吞込んだ。聽て彼は恐れ乍ら何處か田舎訛の言葉で、
「貴郎是れ少しですけれど御食んなさいました……」と一包の菓子を出した

ので、僕は強て拒絶のも悪いと思つて其を受取つた。すると嬉しさうな顔付をして。

「何卒旦那さんにも宜しく願います……」と言つて僕の出で行くのを見送つて居た。

(四十五) 祭禮の最終日

二月廿一日、火曜日

鎮守の祭で僕等の市は者返る様な騒だ。町の辻々人家の軒先は言はずもあれ、何處へ行つても美しい飾物や賑かな見世物は全て人を酔はして居る。殊に今日は其祭の最終日で、花車や假装行列があるといふので、此景況を見る近郷近在から見物に出てきた老若男女は幾萬人だか知れない。家の家根や二階の窓から往來の方を見ると、市街は全て人や飾で埋まり、樂隊や囃子の響

で耳も聳になりさうだ。又花車の上では假面を被つた踊手が引つきりなしに騒いで居る。酒を飲む者、菓子を食べる者、冗談を言ふもの、口論をする者、跳る者、怒鳴る者、至で此世界の人が一度に氣でも狂つたかと思はれる様だ。恰度今僕の家の一の大きな花車が四匹の馬に曳かれて囃子をしながら練つて来た。其馬には皆金びか／＼の飾物が付けてあつて、花車は至で花を以て埋まつた様だ。さうして此花車の上には十四五人の男の人が皆假髪を被つて、何か古代の服装を着け、囃子につれて踊つたり歌つたりして居る。其人は練行く路上に手を叩いては何か群集の中に菓子を投げて行く。此騒の最中に忽然一人の男が道路の左側から大聲を擧げて、

「さあ皆少し退いたく、さあ御免よ！」と怒鳴り乍ら、頭の上に五六歳位の女兒を指上げて群集を分けつ、花車の方へ近づいて来た。聽て花車の側迄行くと、花車の上に居る人々に、

「迷兒だ、危ないから其處へ載けて置いて呉れ……」と言つて其女兒を花車の上の人に渡した。

渡された女兒といふのは、此人衆の中でお母さんに離れてしまひ、既の事踏殺されやうとしたのを、囊の大男が漸く救出したのだ。花車の上では此騒に一時歌もやめ多勢で其女兒を取圍んだ。所が此兒はお母さんの手を離れたのみか這麼知らない處に同伴られ、加之皆假髪なんか被つて妙な風をして居るもんだから、其を見て恐がつて、お母さん戀しさに一入烈しく泣き出した。夫故其女兒を受取つた男の人は被つて居た假髪を取つて其兒を宥めたり賺したりしたが、一向に泣き止まない。花車は静々と練つて行く。

此時遙か街道の彼方に、群集を押分けて狂氣の様に叫びつゝ飛び来る一人の婦人があつた。

「毬子や、毬子や、毬子は甚麼したよ！」と叫びつゝけて十五分間計り無中、

に探索して居たが、餘り多くの群集の爲に何時しか身動きも出来ない様になつてしまつた。

一方では其花車の上の女兒は、只もう恐がつて誰のいふ事も聴かないで、「阿母ちゃん、阿母ちゃん！」と叫び續けて居て手の付け様がない。多勢の者も菓子や密柑をやつても皆捨て、しまふ。致方がなしに花車の上から群集に向つて、

「此兒のお母さんは居ないか！」と怒鳴つた。併し何しろ大勢の事だからお母さんが居るのか居ないのか、又誰がお母さんやら一向に半明らない。

霎時すると、曩に「毬子、毬子」と叫んで居た婦人は頭髮を亂し、眼の色を變へ、衣服は綻び喰る様な聲を出して全で狂氣の様に其花車目懸けて突進して來た。是は今其婦人が我子の花車の上に居るのを見つけたからである。併し其周圍に居つた人々は、此婦人が喜びの餘り恚風をして居るのか、そ

れとも悲みの爲が將怒つて居るのかを知らなかつた。婦人は其花車の側へ行くや、猛へる虎の如く其兩腕を廻し我子を取戻さんと花車に飛付いた。其權幕が餘り烈しかつたので花車は一時其所に止つた。

女兒を抱いて居た男の人は直ぐ其婦人を見付け、

「お、貴女の御兒さんですか……まあ宜かつた……さあ……」と言ひ乍ら其女兒を手渡したが、其時の婦人の喜びや如何に、彼は感極まつて其兒を自分の胸にひたと抱き付けた。

其婦人が花車の所を去らうとした時に、曩に抱いで居た男の人は、自分の右手の指から大きな金剛石入の金の指環を取り、其を其女兒の指に嵌て、

「是はお嬢さんの嫁入道具に差上ましましやう」と云つて與へた。

其お母さんは再び喫驚いて失神した様に茫然と立つて居た。其男の人は再び偉髪を被り車の上からは又賑かな囁子が初まり花車は徐々と動き出した。

群集は此有様を見て暫し、拍手喝采の聲が鳴り止まなかつた。

(六十四) 盲生々活

二月廿四日、金曜日

今日僕等の受持教師は病氣で缺勤した爲、五年級の先生が代つて受持つた。此五年級持の先生は學校中一番年長者で、頭髮などは綿帽子でも被つた様に眞白だ。此先生は嘗て盲人學校に奉職して居た事があるさうだ。此先生の聲は一種妙な響があつて、恰度何が悲しげな音樂でも聞く様な思がする。併し中々話上手で、又色々な事を知つて居る。

先生は今日教室へ這入つて来るや否や、一人の生徒が眼に繃帯をして居るのを見て直ぐ其生徒の側に行き、

「甚麼したんですか……眼は大切にしなければ不可ませんよ」と言ふと、毛

戸は脇から何か思出した様に、

「先生、先生は前に盲人學校に居らつしやつたつて本統ですか」と尋ねた。

「わゝ、五六年居ました」

毛戸は聲の調子を低くして、

「先生夫では今日は何か盲人に就てのお話をして下さい」と願つた。

先生は躡て教壇の所へ歸り椅子に腰を掛け、暫くして一同に向ひ、次の如く語つた。

「一体皆さんは只盲人盲人と言はれるけれども、盲人だつて中々馬鹿になるもんではないです。まあ併し盲人なんていふ者は實際氣の毒なもんで、何しろ物の色といふ物が皆目判明らないんですからな。夫だから夜晝の區別はなし、空中も太陽も、親兄弟も其他自分の周圍に在る物でも何んだつて見るといふ事は出来ないうんですからね……詰り限りなき暗黒世界に居るやうなもん

です。まあ諸君が一二分間試に眼を鎖して居て御覽なさい。結局其眼を鎖して居る時の様な感情が永久に續くと思つたら宜いでしやう。左様考へると少くも一種の恐怖と悲痛とに襲はるゝ様な氣がするに相違ないです。到底吾々眼明きには那麼事が想像も出来なければ實行は無論出来ません。まあ恁麼事を強制されたら大底の者は狂氣になるが左もなくば悶死んでしまふでしやう。併し試に盲人學校へ行つて、盲人達が休息時間に遊んで居る所なんかを見やうもんなら、夫は到底盲人とは思はれぬ位萬事に慣れたもんです。ゾア、イオリンを弾く者、笛を吹く者、又大きな聲で話をしたり笑つたり。又は梯子段を走つて上り下りをしたり、教室や寄宿舎などで自由に飛び歩き廻はつて居ます。さうして皆元氣のよい而も愉快らしい十六七八歳位の青年計りです。一見したる所は恁うも大膽に平氣で愉快らしく生活をして居ますが、倍其元を調べて見ると皆夫々悲しむ可き不幸な歴史を持つて居る者計りです。

實際諸君などが想像だも及ばない様な苦痛を経て來て居るものが多いのです。或者は外科手術の結果失明したのもあるし。病氣ではなく偶然の出來事の爲僅か一兩日中に盲目になつた者なども居ります。其他生れ乍らにして盲目なのもあります。恁麼人は生れたとは言へ、物の色といふ觀念が全く無いのですからまあ墓穴の内にでも生れた様なもんでしやう。是等を考へると諸君等は如何位幸福か判りません。私も恁うやつて學校教師として永年働いて居ますが、兎に角彼等の境遇は氣の毒なもんだといふ事を適切に見分ける事が出来ます。

世の中には、恁麼いふ様な不幸な盲人が其學校以外幾許位澤山居るか知れません。是等幾萬の盲人達は皆吾々眼明と同様な愉快を持つ事が出来ないのかと思ふと實際同情の念に堪えません』

先生は暫く言を絶ち嘆息する様な容子をして椅子に靠れた。

毛戸は又問ふた。

「先生、盲人は眼明きよりも觸覺が鋭敏だと云ひますが本統ですか」

先生は更に語り續けた。

「は、本統です、其は眼明きと同じ犬の刺戟を受けても、受ける機管が一つ少ないから怎しても其他の感覺が鋭敏になる譯です。よく寄宿舎で見受ける事ですが、朝早く今日は天氣が宜いかしらと思つて誰か尋ねると彼等は直ぐ運動場に出て、手を出して太陽の光線が出て居るか何うかと見て晴天曇天を判断します。又對話をして居る時に、其人の話聲で、大抵相手方の身丈を知ります。又我々眼明きは相手の眼付きで其人の心を想像しますが、盲人は其話聲で想像する事が出来るさうです。又盲人といふ者は音の調子や高抵を記憶する事が至つて上手なものです。其外一室に二三人居つて其内一人しか喋舌らなくつても其室内には一人でなくつて數名の者が居るといふ事を知覺事

が出来来る。又往來を歩く時盲人が二人連が歩き乍ら各商店の順番を善く記憶して居て正確に其を當てるさうです。彼等は又獨樂を廻し、其廻る音で巧に其獨樂を手の上に取つたり、又篋廻しをしたり。網飛びをしたり。石細工や花輪を拵へたり、夫は仲々無器用な眼明きが適はぬ位巧にやりますが、是等は要するに皆其觸覺等が眼明きよりも發達して居るからであります。

彼等の樂みといふのは物に觸つて其物の形狀を想像したり握つたり掴むたりする事です。夫故工藝品展覽會などへ同伴で行つて色々の模形品や實物に手を觸れさせて説明してやると皆大喜びでもつて、彼等は此事を決して觸ると云はずして物を見て來たと言つて居る。」

此時刈屋が先生の言葉を遮つて、

「先生盲人は勘定する事が上手だつて言ひますが本統ですか」と尋た。先生は更に、

「わ、本統ですとも、盲人は勘定どころか書く事すら出来ません。尤も盲人には盲人特有の文字が有つて、其は點字といつて普通の平面紙より幾分か凸起して居る六ヶ以内で組立てたる點の配列法で五十音と數字とが皆定まつて居るのです。盲人達は自分で點字器を持つて其點字を書きもするし又読みもします。」

其を読む時は、其點字の上を指先で觸り乍ら其配列法に由つて讀んで行くのですが、其速かな事や流暢と讀む事は到抵拙な眼明は及びません。又盲人は物を見ないからして、自然心が他に散らないで、暗算などの速くつて上手な事は想像外です。又彼等が五六人集まつて話をする時でも、眼明きの様に一々向合つて話す必要がないから、後を向いたり横を向いたりして話して居ますけれども、毫も相話手を間違へる様な事はありません。此は其話相手の聲を記憶して居るからですが眼明きが見ると一寸滑稽に見えます。

尙茲に一つお話しして置きたいのは、盲人は學校の試験の時などは随分善く勉強するものです。さうして先生を愛する念が一般に深い様です。是は恐らく自分の不自由を感じる事が多いので、自然他人を敬愛する念が深くなつて來るから起る爲でしやう。恁麼風ですから友達同志でも一般に仲が好く、互に助け合つて喧嘩をするなんていふ事は滅多にありません。夫故遊ぶにも獨りで楽しむといふ様な事がなく多勢一緒に喜を共にするといふ傾向があります。又教室に居て先生が廊下から這入つて來る時、其足音で今度は何先生が來たんだなんていふ様な事を巧に當てます。又先生の話を聞いて、あ、今日は先生が少し不機嫌だとか病氣だとかいふ事を確然言ひ當てます。又試験の成績でも善くつて賞められた時などは、必ず先生の手に觸れて其喜びと感謝の意を表はします。盲人は恁ういふ様に自己の不自由を感じる事から同情の念に厚い結果親友とでもいふ様な友達間の交情は、外の見る目も羨ましい

程親しみ深いものであります。』

此時保地は、盲人等は奏樂に巧なりや否やを問ふたもんだから、更に先生は語り續けて、

「彼等が音樂を好む事は非常なもので、音樂は殆んど彼等の生命とも言ふ可き程です。此は物を見るときいふ樂みが無いから自然と音を聞くといふ方に樂みを求める結果だらうと思はれます。學年初めなどに、小さな盲生が一年に入學すると、初め三時間計りは動きもせずに音樂に聴きとれて居ます。併し三時間も聴いて居ると、大抵は歌などを覺てしまつて夫からは熱心な音樂研究者と爲るのが普通の様です。まあ兎に角音樂は彼等にとつて最上の娛樂でしやう。萬一仲間同志で喧嘩でも初まると直ぐ音樂をやつて其仲直りをします。夫故一寸面白いのは盲生中に何か惡戯をして處罰でも受ける者がある時は、必ず其者に對して讀書と音樂が禁せられます。是れ蓋し讀書と音樂は

彼等にとりての最上の樂みであるからです。』

毛戸は更に其盲人學校參觀を先生に尋ねたら、先生のいふには、

「出来るには出来るが併し今は不可ません。其は諸君が行つて見た所で諸君には真に彼等盲人の不幸なる境遇に對する同情心が浮ばないからです。實際同情の無い訪問は無益ですから、他日諸君が充分に經驗ある同情を以て訪問した方が宜いでしやう。併し眞心から出た同情を以て訪問する事は決して悪い事ではないですから其心算でされたら宜いでしやう。實際盲人の學校に居ると色々な悲惨な事實を目撃する事が多いです、生れつき盲人なのは致方ないとしても、生後六七歳位で失明した盲生などが、其幼稚な頭に在つた幽かな記憶が、年を経るに従つて薄らいで行き、盲人學校の生活をする時分には自分の兩親や兄弟の顔や姿を記憶して居ないで、折々母親などが寄宿舎へ尋ねて來てもお母さんの顔が見えない爲に、只お母さんに抱かれたりお母さん

の顔に觸つたりしては『お母さん、お母さん』と呼ぶ其聲は一種趣のある悲痛と愛情とを含んで居る事を覺ります。恚ういふ所を見たら、恐らく如何に頑固な人でも同情の涙を催す事だらうと思ひます。

「盲人といふ者は實に此世に在り乍ら天もなく地もなく且つ顔のない、両親や兄弟を有つて居ると同一です。諸君、諸君は是等不幸な盲人達から見ると如何程幸福かわかりません。夫故、何卒身体を大切にして勉強をして下さらん事を願ひます。」

(四十七) 平保先生の病牀を訪問す

二月廿五日、土曜日

昨日學校からの歸途に、僕は平保先生の家へ立寄つて先生の病氣を見舞つた。先生の病氣は餘り身体を使ひ過ぎた爲起つたのだと僕のお母さんは言つ

て居つた。何しろ一日の受持時間が僕の級で五時間、体操が一時間、其上夜學へ行つて又二時間教へるんだから疲勞のもの無理はない。夫だから實際食事なんかも掻込む様に食べて、殆んど朝起きてから夜寝る迄息をつく間も無いといふ事だ。

お母さんは家へは這入らないで門の外に待つて居るからといふので僕は獨り門を排けて這入ると其所には黒鬚の一杯生へてる、三年の好地先生が居つた。

「先生は例の大きな獅子の吠る様な聲で、

「お、圓次さんかい……平保先生の御見舞ですか……」と言つたけれども平常の様に笑はなかつた。

僕は好地先生と別れて玄關に案内を乞ふと、一人の下婢が出て来て僕を先生の部屋に通した、先生の部屋は汚なげな薄暗い部屋で、其部屋の真中に先

生は寝て居つた。先生の髪は此前見た時より餘程延びて居る様だ。挨拶が済むと先生は、光線の工合で能く僕の顔が見えないと見て、額所に手を翳して僕の方を見ながら、

「圓次さん、善く来て下さつたね、まあ這方へ御寄りなさい……」と言ひ乍ら起直つた。

「圓次さん、先生は病氣で恁麼に寝てしまつた……學校は何うですか。俺が行かないでも皆大人しく善く勉強して居ますか……」

僕が返答をしようと思つて居る内に先生は尙も言葉を續け、

「貴郎は俺を嫌じやないね……。」と嘆息をつき乍ら僕の顔を睜視た。此時僕は其部屋の壁に幾かの寫真が懸けてあるのを認めた。

先生は更に其寫真を指差し、

「此寫真はね、此は皆二十年も前に俺が教へた生徒の寫真です。此小供達は

皆腕白者が多かつたけれども善い小供ばかりで、今では、皆成人して立派な人になつて居るでしやう。俺は死ぬ迄恚ういふ小供と一緒に居たいと思つて常でも恚うやつて掛けてあるのです……圓次さん、貴郎も學校を卒業する時には一枚下さいな……。」と言つて側に在つた盆の上から密柑を取つて呉れた。

「さあ何にも無いから密柑でもお食んなさい……。」

僕は何んだか悲しくつて氣が遠くなる様に感じた。

先生は尙語り續けた。

「俺は一刻も早く全癒つて學校へ出たいと思つて居りますが人間の壽命といふものは判らないもんですから、若し俺が是で學校へ出る事が出来ない様になると、自然貴郎にも教へを授ける事が出来なくなるでしやう。さうしたら今から注意して置きますが、貴郎は算術が不得意だから、算術を一番勉強し

て下さい、算術といふ學課は、將來何になるにしても必要なものですから、此は一つ充分に骨を折つて下さい、今の内に骨を折つて勉強せんと先に行つては益々困難になりますから……」と頻りに咳入つた。先生は尙も言葉を續

「俺は少し熱がある様だ……圓次さん解りましたか、若し算術の問題で怎うしても判らないのがあつたら、其を其儘折捨てしまはないで、一寸休んでから又考へ直して御覧なさい。左様いふ様にして勉強したら段々と上手になります……さあ圓次さん、もうお歸んなさい、お家で待つて居なさるでしやうから……お父さんやお母さんに宜しく言つて下さい。夫から貴郎はもう二度と御見舞に來て下さらなくつても宜う御座います。此次には學校で健康な顔をしてお目に掛りますから……併し若し是で二度と學校へ行けなかつたら、折々は貴郎を好いた平保先生といふ人が居つたなといふ事を思ひ出して

下さい」

僕は先生の親切が沁々と心に徹へ、何んだか泣き度くなつた。併しお母さんが外に待つて居るのに氣付いて、叩頭をして急ぎ先生の家を辭した。

(四十八) 道路上の注意 (父上の教訓)

二月廿六日、月曜日

「今日お前が先生の家から歸つて來るのを、お父さんは窓から首を出して見て居た。所がお前は往來を走つて來ながら一人の婦人を突飛ばしたまゝ逃げて來たな。往來を歩く時はもう少し慎んで歩かねばいかん。誰だつて往來を歩く時は歩く上に責任がある。往來は決して自分獨りの所有物ではないのみならず、假令家に居つても家に對する相當の責任といふ物がある。尙更往來は萬人の使用する物で、人々がお互に譲合つて、又其を汚さない様にする責

任があるのだ。又往來を通行する人の内には、老衰せる者や、貧弱な者や、嬰兒を抱いた婦人や、禮服を着た官吏やなんと様々の人が通行するもんだ。是等の人々に對しては皆お互に相當の敬意や同情を表して歩かなければ不可ない。殊に自轉車にでも乗つて行く時は尙更注意をしなければいかん、途中で小供に出合ふとか、四辻の様な所で他の乗物との衝突を注意するとかいふ事が肝要である。又友人が途中で喧嘩口論でもして居る場合には其を中裁してやるとか、又葬式の行列や病院の釣臺などに遇つたら、殊に靜肅にして、故意と大聲に話をしたり笑つたりするもんでない、併し大人が喧嘩をして居るとか知らない人が口論をして居る時などは仲裁をするにしても危険と思ふ時は妄りに世話を焼かない方が宜い、却つて那麼時には避けて近寄らない方が安全である。又人が巡查などに引かれて行く時などに好奇心でぞろ／＼後から隨いて行くもんでない。又盲人とか道不案内の人とかい道路を尋ねた

ら充分に親切に、教へて遣れ、何んでも往來通行中は、必要な事に安りに怒鳴つたりしては宜くない。又他人の迷惑をも顧みず人を突飛ばすが如きは最も宜しくない。

昔から言つて居る諺で、能く智識あり又經驗ある人や、世界旅行家などが「一國人民の教育の程度は、其國民の途上の舉動言語に由つて窺知るを得る」と云へるのも、實際正當な理由ある言葉である。兎に角往來通行に就ては、相當責任を重んじて輕舉や暴動を爲す事無き様、且又道路其物を愛護する精神が肝要である。」

(四十九) 夜學校を參觀す

三月二日、木曜日

昨晚僕はお父さんと一緒に僕の學校の夜學部を觀に行つた。僕等が行つた

時は既に洋燈が點せられて、多くの勞働者がぞろ／＼這入つて來る所であつた。僕が教室の方へ這入つて行つたら、校長先生や他の先生達が頻りに大きな聲で何か話をして居て校長先生などは怒つて居る様だ。何事かと思つて其側に行つて見ると、今表通りに面した教室の窓硝子に石を投げた者があるの
で硝子が一枚破壊たといふ騒なのだ。

聽て事務員が一人の少年を引つぱつて來た。其少年は恰度今其窓下を通行して居たので、事務員が其少年の惡戯だと見當を付けたので捕かまつたのである。所が先生達が其少年の周圍に群つて何か尋問やうとすると、學校の直ぐ前に住んで居る僕等の級の須田が這入つて來て、

「先生、石を投げたのは其人ではありません。私は見て居つたから確實に知つて居ります。其は村地が投げたんです。村地は石を投げた時私が見て居たので私に向ひ言附たら承知しないぞと云つて飛んで行きましたけれども私

は假令村地が何んと言はうと毫しも恐れませんが……確かに村地が投げたんです……」と訴へた。

校長初め諸先生は須田の言ふ事を聞て居たが、校長は稍怒つた顔付で、

「もう村地は仕様がな……彼は退學させた方がよい……」と嘆息せられた。

僕は側の方で夜學に來る人々を見て居つた。彼等は大抵二三人宛組んで來るが、全体では二百人の上も來た様だ。僕は今日迄夜學部が恠麼にまで盛なものだとは知らなかつた。彼等の内には十二三歳の少年勞働者も居る。又露の生へた大人が工場の歸途と見えて辨當を持つた儘、本や帳面を擦げながら來るものもある。又大工もあれば機關士も居る、石屋も來る、麵麩屋も見わた。恠麼風に教場は様々な職人が集まって居るから色々な匂がする……魚の匂もすれば油の香もするし、革皮の匂がするかと思へば假漆嗅のもある又兵士の様な服装をした銃器製造所の職工連中が、伍長に引率せられて這入

つて来た。彼等は皆順序正しく着席したが、腰掛が低いので僕等が足をのせる机の下の板を外して腰を掛けて居る。さうして皆夫々讀本や筆記帳を擴げて一生懸命に勉強を初めた。

或者は先生に説明をして貰ふ爲、帳面を持つて教壇の所へ出て行く者もある。立派な洋服を着た若い法律先生の組では今三四人の労働者が教壇の周圍で作文か何かを直して貰つて居る。又波波先生は染物屋の小僧が青と赤の色で染た筆記帳を持つて来て居るので、其を見て笑つて居る。平保先生も病氣が全癒つたと見えて出勤せられて居る。多分明日から僕等の級にも出られる事だらう。教室は何れも戸扉が開けてあるので教室内の模様が全然判明る。彼等労働者は皆熱心に讀本を讀んだり作文を書いたりして居る。外見をする者なんか一人も居ない。併し校長先生も心配して居られるのだが、是等夜學部の生徒は大抵仕事の歸途に學校へ来るから未だ晩食前で、皆空腹を忍んで

勉強して居るんだらう。

恰度授業が初まつて卅分許經過と、少年労働者の中にはしきりに假睡をする者があつて、終には机の上に頭を押し付けて、鼾をかく者もあつた。先生は其を見ると靜かに其席の所へ行つて、筆の先で其眠つて居る生徒の耳を櫛つて彼等を醒まさうとすると、彼等は喫驚して飛び起きるので其顔付が如何にも滑稽である。併し流石大人の連中には那麽居睡をする者がない。皆瞬もせず一生懸命に教壇の方を向き、大きな口を開いて先生の言ふ事を聞て居るだけども平常僕等が腰を掛ける所に那麽髭なんか生へた大人が大きな口を開いて先生から讀本なんか教はつて居るかと思ふと可笑い様な氣がする。僕等は二階へ上つて行つて僕等の教室の前に来た。此教室にも労働者が一杯這入つて居る。僕の席には什麼人が居るかと思つて見ると、立派な上髭の生へた労働者で、右の手に繻帶をして居る人が腰を掛けて居つた。彼は恐ら

機械か何かで怪我をしたんだらう。腕が充分利かない爲か筆記帳に作文か何か書いて居るが手の運も頓束なげに見ゆる。

僕は段々と教室内を見廻はすと、向ふの隅に在る石屋の席には、大きな體軀をした石屋のお父さんが躊躇る様に背中を丸くして讀本を見て居つた。僕は其を見た時に何んとも言はれない嬉しい感じがした。石屋のお父さんは頤腕を突いて熱心に勉強して居る。彼は初め夜學に来る時、校長先生に願つて何卒自分の悴の席に腰掛さして貰いたいと依頼したので、夫から常でも石屋の席を占めて居るんださうだ。

僕はお父さんと一緒に夜學が終る迄見て居つた。夜學が済むで往來に出ると、多勢の女達が、嬰兒を抱き乍ら自分達の亭主が夜學から歸つて来るのを待受けて居るのを見た。彼等の或者は、夫が學校の門を出ると直ぐ嬰兒を夫の手に渡し、自分は夫の布呂敷包を受取つて樂しげに並んで歸つて行くのも

あつた。恁麼工合に、夜學部が終つた時は一時學校の門前は中々の混雜で、晝間我々の退出る時の騒所ではない。併し數分と經過ぬ内に、彼等は皆各自に退散して、其後には一人校長先生の丈高き疲勞た様な姿が、夜の間に消行くのを認める計りであつた。

(五十) 村地と須田の喧嘩

三月五日、日曜日

必然恁麼事が有りはせんかと案じて居た通り、昨日學校の前の大通で、須田と村地の喧嘩があつた。僕の妹の静子は、學校の歸途に其喧嘩をした所に合はしたので、喫驚して顔へ乍ら歸つて來て其顛末を物語つた。

村地は、須田が自分の石を投げた事を學校に行つて喋舌つた爲、自分が學校から出されたのを恨んで、何時かは須田を窘めて遣らうと思つて付け狙つ

て居つたが、恰度昨日須田が妹を迎に女子部の方へ行つて、妹と一緒に出て来た所を街道の四辻の所に待伏して居て喧嘩を賣つたのだ。村地の奴は忽然須田の後に廻り、須田の妹のお下げの頭髪を強く引張つたので、須田の妹は喫驚して危ふく後へ倒れる所だつたのを辛ふじて踏止まり、大聲を出して救を叫んだ。

須田は妹が餘り突然叫出したので驚いて後方を見ると、村地の奴が妹の頭髪を引張つて居るので、到底も適はぬ喧嘩とは思ひ乍らも、此處妹を救ふ可き一大事と、矢庭に村地に飛かゝつた。村地は、何んの小癩など云はぬ計りの顔付して須田の方へ向いた。恙うして二人は暫くの間互に打ちつ打たれつ、組んでは離れ離れては又組み、力のあらん限り投げ合つたが、何を云つても體軀が大きくつて力の強い者には勝てないのが理の當然で、須田は村地から大分擲られた。又合憎にも此時其近邊には男の人か一人も居なかつたの

で、誰も進んで喧嘩を仲裁しやうと云ふ者がない。

其内須田は段々と受身になつて来て遂々地面の上に組伏せられてしまつた。併し須田は満身の勇氣を奮ひ起して再び起き上り、小獅子が吹るが如き勢にて村地に飛びかゝつた。其時須田は一方の耳を怪我して又目の上は腫れ鼻血さへ出て居つた。須田は已に無中になつてしまつて、

「貴様は俺を殺す氣だな、此方にも覺悟があるぞツ……」と叫んで擲らうとしたが、又もや哀れにも擲り殞されてしまつた。

須田の倒された上に村地は馬乗りになつて又彌が上に擲つたり蹴つたりした。

須田は下になつて居ながらも、頻りに起上らんと渾身の力を出して勉めるけれども、今は諸々の痛手に夫さへ出来なかつた。

此時一方の二階の窓から、一人の婦人が顔を出して、

「大きい人の方が悪い……喧嘩はお止めなさい……」と叫んだ。すると周囲に群つて居つた多くの女生徒達は一聲に、

「此人は亂暴よ！亂暴よ！須田さんは妹さんを助けやうと思つてなかつたのに……此人は卑怯な人よ……卑怯や！卑怯やい……」と叫んだ。

須田は漸く立上つて又村地と組み付いたが、今度は何ういふ機か、見事に村地を倒して其胸の上に自分の膝をのせた。

此時一方の群集を押分けて突然一人の男が怒鳴り乍ら飛出した。

「何んだ貴様は、其……小刀を持つて……危ないじゃないか、小刀を捨てろやい、悪戯者奴！」と言つて村地の其時衣兜から取出した小刀を接取らうとした。併し己に此時須田は村地の片腕を抑へつけて、其小刀を持つて居る手の指を噛んだので、流石の村地も是には耐兼て、遂々小刀を手離した。其時村地の指からは血が流れて居つた。

恚うして居る内に、多勢の人々が集まつて来て、兩人を引分けてしまつた。さうして、村地が萎れたるに引換へ、須田は堂々と立つて村地を睨付けた。須田の妹は側に居て只恐しさに泣いて居る。妹の友達は、其邊に取散ばつてあつた本や帳面を集めて須田に渡した。

此喧嘩を見て居た人は、皆須田の方は正しくつて且つ其勇氣ある事を賞讃した。

須田は今や全く勝利者の地位に在る、併し彼は己に自己の勝利といふ事よりも、學校の課業といふ事に注意したと見えて、自分の革囊を探し、其内の讀本や筆記帳に紙の切れた所などがありはせぬかと、一々詳細に驗べて、且つ本や帳面の汚れた所を叩き、其を丁寧に革囊に納れて平常の如く靜かに妹を同伴して、明日の學課は豫習が忙しいから早く家へ歸らう……』と言ひ乍ら急ぎ足に家の方へ歸つて行つた。

(五十一) 生徒等の父兄村地を恐る

三月六日、月曜日

今日須田のお父さんは須田を迎へに學校へ来た。是は又村地から喧嘩でも仕懸けられると不可ないからと思つて来たのだ。併し或人が、村地はもう感化院に送られるから大丈夫だと云つて居つた。

今日は、昨日の村地と須田の喧嘩で、父兄達が大分心配したと見えて、平常よりか付添の人や送り迎への人達が多い様だ。其内には薪屋をして居る是地のお父さんも見えた。僕は是迄學校や、家や、往來などで遇つたので大抵の友達や兄弟は知つて居る。又今日来た付添の連中には、二年級の或生徒の付添のお嬢さんが居つた。此お嬢さんは、腰が少し屈曲つて居るが、中々達者で、孫の世話は實に痒い所に手の届く様によくする。孫の外套や傘

でも自分獨りで持つて来て急に雨でも降らうもんなら二度も學校と家との間を行歸りする恚ういふやうに孫の世話をするのは實に外から見ても羨ましい程だ。此お嬢さんは、此世界で此孫の世話をする程樂みな事は無いんだらう。今日は又砲兵士官をしてゐる六郎君のお父さんも見えた。此人が来る時は生徒達は皆其軍服を見て敬禮をする。さうすると六郎さんのお父さんも亦莞爾しながら誰にでも丁寧挨拶をする。

併し僕等は折々悲しむ可き出来事を見る事がある。現に今日も一ヶ月計り遇はなかつた或る生徒のお父さんに出遇つた。此人は自分の小供の一人が死んだので、恰度一ヶ月計り顔を見せなかつたので其間は下女をして外の小供の送迎をさせて居つた。所が今日久々で學校に来たが、自分の死んだ小供の友達皆爽快として居るのを見て非常に悲みの情が起つて見えたが、校長先生が来て其を見ると直ぐ其人を校長室の方へ同伴で行つた。

恰度校長室には多くの生徒の父兄達が集まつて居つた。是等の人々は、大抵其息子や弟の名前を知つて居るので愉快らしく挨拶をして話をして居つた。中には高等学校の生徒で弟を迎に來たのもあるし、女子部の生徒で弟を一緒に同伴して歸らうとする者も居つた。又一方の隅には休職陸軍大佐も居つたし、又何が頻りに學校の噂などをして居つた立派な婦人も居つた。

恁麼工合に多くの父兄やお母さん達が寄合ふから、若し生徒の中に病人でもあると直ぐ其が知れ渡るし、又病氣が全快すれば直ぐ判る。今朝も父兄達が待合はして居る所で、八九人のお父さんやお母さん連中が一人の野菜賣の黒瀬のお母さんを取圍んで頻りに何か病氣の模様を尋ねて居た。此は黒瀬の家の直ぐ側に住んで居る一人の二年級の生徒が大分病氣が重いので、皆も其に同情して心配して居つたからである。

ほら吹小僧終

明治四十二年十二月十四日印刷
明治四十二年十二月十七日發行

ほら吹小僧與付
（定價金三十五錢）

著者	著者	發行者	印刷者	發行所
水南	梧河	本	本	本
南	水	吉	田	正
地	地	地	地	地
二十六番	二十六番	二丁目十二番	二丁目十二番	二丁目十二番
地	地	地	地	地
井	井	井	井	井
今	今	今	今	今
地	地	地	地	地
二十六番	二十六番	二十六番	二十六番	二十六番
地	地	地	地	地
本	本	本	本	本
振替口座	振替口座	振替口座	振替口座	振替口座
一四九六一番	一四九六一番	一四九六一番	一四九六一番	一四九六一番
番	番	番	番	番
院	院	院	院	院

賣捌所

東京堂、至誠堂、上田屋、太平洋堂、前川文榮閣、林平次郎、東海堂、北隆館、大坂吉岡、杉本書店、盛文館、京都東枝律、久留米菊竹、名古屋、大川瀨、長野西澤、金澤宇都宮、札幌富貴堂、鹿兒島吉田幸兵衛、大分甲斐治兵衛、前橋煥乎堂、秋田成見清兵衛、富山中田書店、熊本金書堂、千葉多田屋、其他各書店、最寄賣捌店無之地は當院へ直接御注文を乞ふ

本郷書院發行書目

文學士 小原無絃君譯

花の詩 (新刊)

定價 金五拾錢

同

ユーゴーの詩

定價 金參拾錢

同

西吟新譯

定價 金四拾錢

蒲原有明著

春鳥集

定價 金七拾錢

文學士 小山内薫君著

夢見草

定價 金參拾錢

田中義成先生序

異本山家集附西行論

定價 金八拾錢

幸田露伴先生序

異海潮音

定價 金八圓

文學博士 上田敏著

鳥水文集 (最新刊)

定價 金七十五錢

本郷書院發行書目

横瀬夜雨君著

花守日記

定價 金六拾五錢

文學士 熊谷無滯君著

修養講話 (近刊)

定價 金八圓

内藤鳴雲題

かぶさ俳句集

定價 金廿五錢

白藻會編

名家俳句講話集

定價 金參拾錢

天生目杜南編

古今滑稽句集

定價 金貳拾五錢

目書行發院書郷本

前田林外君撰訂 日本民謠全集 前篇 定價金各五拾錢
 後篇 定價金六拾錢
 巖郷左工門編 やなぎだる 定價金廿二錢
 鳩箭子の著 自治療生活 定價金四拾錢
 附高等學校一覽
 佐藤芝峰君著 筆のあとと近刊
 文 學 士 評 久保天隨君著 日本絶句選 定價金參拾錢
 釋 楓村居士雄 日本名妓傳 近刊 定價金四拾錢

目書行發院書郷本

押川春浪著 世界冒險少年譚 (八版) 定價金參拾錢
 同 小説 怪雲 奇星 (九版) 定價金四拾錢
 同 冒險 絶島軍艦 (七版) 定價金四拾五錢
 同 武勇 人外魔境 (八版) 定價金參拾五錢
 同 冒險 幽靈旅館 (八版) 定價金四拾錢
 同 冒險 海島奇傑 (二版) 定價金四拾五錢
 同 探險 奇男兒旅行 (六版) 定價金六拾錢
 同 萬國 幽靈怪話 (二版) 定價金四拾錢
 郵稅金六拾錢

目書行發院書鄉本

押川春浪序	鬼器	血	か	肉	か
江見水蔭君著	寶地	奇窟	怪	嶽	(三版)
山中古洞君画	探檢	奇窟	怪	嶽	郵定價金四拾錢
鹿島櫻巷著	事實	冒險	志士		郵定價金四拾錢
小島榮達畫	奇譚	冒險	志士		郵定價金四拾錢
鹿島櫻巷君新著	冒險	貨物	旅行		郵定價金四拾錢
小杉未醒君畫	奇譚	貨物	旅行		郵定價金四拾錢
鹿島櫻巷著	冒險	貨物	旅行		郵定價金四拾錢
本島櫻巷著	奇譚	八百萬弗			郵定價金四拾錢

目書賣發院書鄉本

押川春浪著	海島冒險	海底軍艦	郵定價金三十錢
同	海島冒險	新造軍艦	郵定價金三十錢
同	戰時英雄小說	武俠艦隊	郵定價金三十錢
同	海島探險	塔中の怪	郵定價金二十五錢
同	傳奇小說	銀山王	郵定價金三十錢
同	英雄小說	新日本島	郵定價金三十五錢
同	英雄小說	武俠の日本	郵定價金四十五錢
同	英雄小說	東洋武俠團	郵定價金四十五錢
櫻井鷗社	青少年冒險談	初航海	郵定價金二十五錢

阿武天風君譯

萬國神話集

定價未定
近刊

希臘神話を歐米文學の源泉として、將た又單にお伽噺として取扱ひしものは別にあり。本書は斯の如き部分的のものにあらずして一般的なり。要は唯神話として、世の少年子女に、其何物なるやを知らしむれば足れり。是れ雖て本書の最も著しき特色なり。加ふるに著者か多大の勢力を費して、希臘以外東西諸國の神話と共に收められたれば、神話を知らんと欲する者には絶好の指針たるべし、讀め！ 讀め！ 就中神秘の鎖鑰を破らんとする者は、必ず先づ本書を座右に備へざるべからず。

文學 探檢世界記者 增本河南 君共譯

本郷書院叢書

全部十二冊
四六刊美裝
彩密畫挿入

定價一金卅五錢 郵稅六錢

本郷書院は泰西古今の名著珍籍奇書中より青年少年諸君の讀物として、或は勇壯に或は珍怪なる冒險的且つ傳奇的なる、好著を擇び、從來本院が出版せる斯道名家の創作著述類と相俟つて讀者の耽誦に投せんと欲す、殊に譯者は當代に於ける此種の文學に第一流の名を馳せつゝある悟水河南二家の筆に成れる逸品なれば、世の血性に富み好奇心に飢へ、紛々たる蕪雜の書に倦みたる青年諸君並に一般愛書家の好評を俟つ!!!

文學 探檢世界記者 增本河南 君共譯

第壹編 ほら吹小僧

定價金卅五錢
郵稅四錢

伊太利國にはほら吹小僧があつた、彼は無邪氣なる學生であるがよく交際して

見るとほらも吹けば悪戯もするさうで、それが又頗る愛嬌があつて、伊太利の本國では大評判、ところが一人が見て面白い事は誰が見ても面白いもので、遂に泰西諸國にまでも持嘶された揚句の果てに、何がな名著を鴉の目鷹の目の譯者にも見知られ、さてこそ此處に現はれて、諸君にも御交際を願ふことになつた。坊ちやんでも嬢ちやんでも、お父さんでも兄さんでも姉さんでも、一人も多く読んで、一人も多く、ほら吹小僧をお見知り願ひたい。

文學士物集梧水君共譯
探檢世界記者 増本河南

第二編 アラビヤナイト

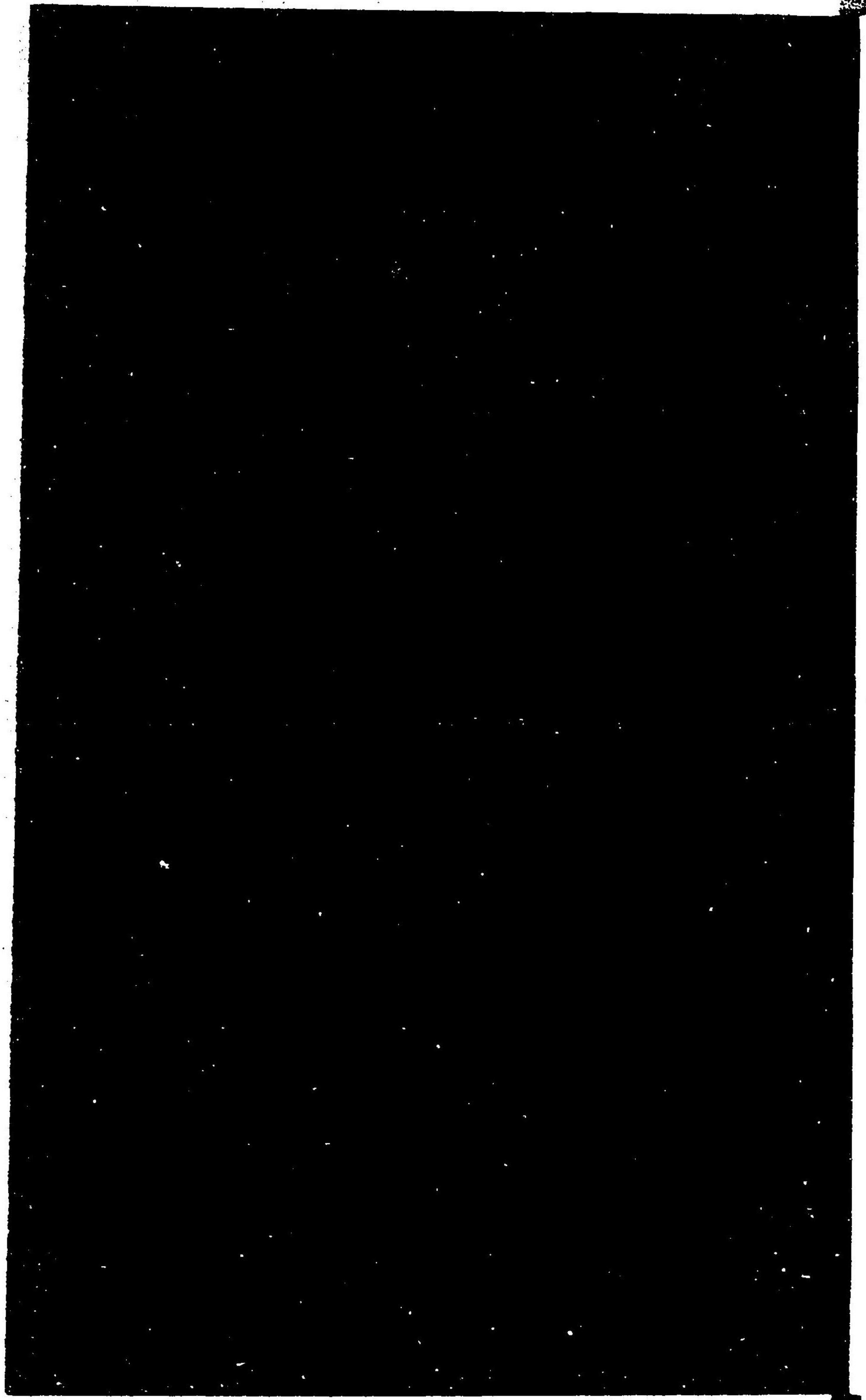
定價 金三十五錢
郵税 六錢

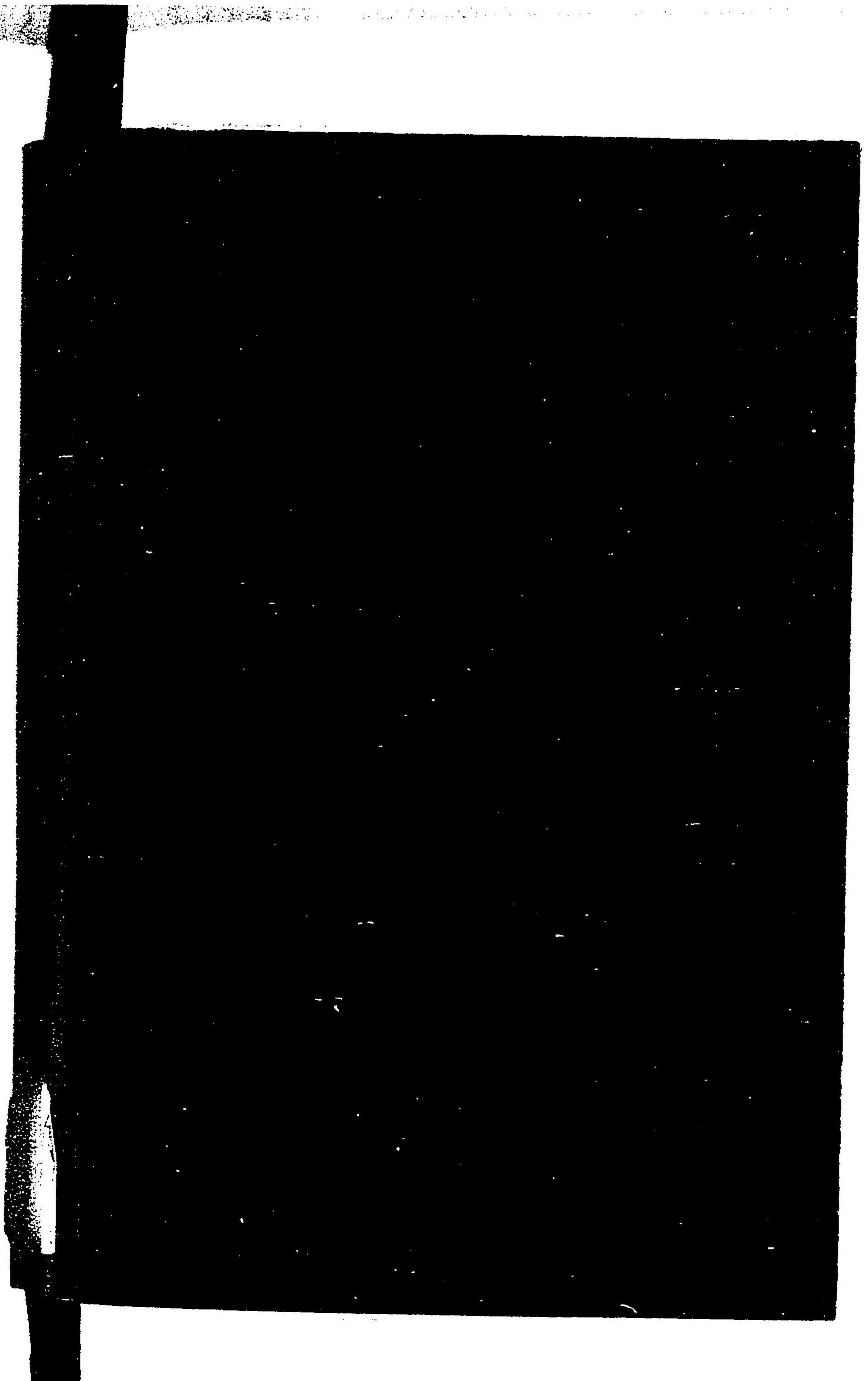
本編は千古の奇書として有名なるアラビヤナイト中より『魔人と商人』『水夫シンドバッドの七航海譚』及び『怪人と漁夫』の三話を抄譯したるものにし就中『水夫シンドバッドの七航海譚』の冒險的なるは他二話の傳奇的なると共に一讀拍案何人も快を喚び奇に驚くものあらん。

(以下續刊)

259
831

在野書院





特 13
27.1

ほら吹小僧

国立国会図書館

101369-000-1

特13-271

ほら吹小僧

物集 梧水

増本 河南 / 訳

M42

DBY-0702



